

今後の幼児教育のめざす方向性

これまでの歩みとこれからの在り方

平成29年1月16日

認定こども園あかみ幼稚園 園長 中山昌樹

はじめに 本日の内容

1. これまでの歩み

・・・これまでの(かつての)幼児教育に対する、1960年生まれの私の印象

2. これからの在り方・・・一地方の、一つの実践

①前提： 昭和から平成に至る過程でおきた、子どもの成育環境の変化

②“すべての子ども”のための学びの視点

a. 時代が移った今、ことさら重視されるべき幼児教育の本質： 遊び

b. 幼児教育を小学校教育に「接続」させることの意味・意義

③持続可能性への取組み

a. 自然生態系に関する持続可能性

b. 文化・人に関する持続可能性

④地域コミュニティを再構築する拠点の必要性

a. コミュニティでの育ちを再生する仕組み

b. 地域・行政との協働

⑤子育て支援・・・親・保護者は支援を要する弱い存在、だけではない

1. これまでの歩み・・・これまでの(かつての)幼児教育に対する、1960年生まれの私の印象

- ・国公立や一部の研究熱心な私立幼稚園、保育園では、子どもの発達に沿った実践を行っており、それが今日まで継承されていることは大変貴重
- ・しかし一部ではあるが、“私学の独自性”として時には、「環境を通して行う教育」を逸脱する実践が行われてきた
- ・しかし、家庭や地域に比較的自由度の高い成育環境があったので、各々の子どもが自発性にもとづいた育ちをしていた
- ・かつての幼児教育は、土台となる、家庭や地域コミュニティでの子どもの育ちに対する、プラスアルファの役割りを果たしてきた
- ・それは一部、親・保護者の就労支援も果たしてきた
- ・一方それは、親・保護者同士をつなげる役割りも担ってきた
- ・しかしそれらは、すべての子育て家庭を対象にしたものではなく、幼・保で分断されたものだった

2. これからの在り方 ①前提:

昭和から平成に至る過程でおきた、子どもの成育環境の変化

【前提となる変化】

☆子どもの育ちに関して、施設の果たす役割がより大きくなってきた

- ・子どもの貧困等の問題が、教育を受ける機会の格差になってきた
→すべての子ども(親の就労状況等に関係なく)を対象にした幼児教育が求められている
- ・国際化や、AI・ロボットとの共生から、知識偏重の教育の限界が見えてきた
→知識の量ではなく、知識をどう得てどう使うのかが問われるようになる
→やり抜く力や自尊感情等、非認知の力が求められるようになる

少子化等の影響

☆幼児教育の投資効果から、これを生涯学習の出発点とする考えが芽生えた

- ・土台となる、地域コミュニティでの子どもの育ちが壊れてしまった
→少子化対策を含めた、地域コミュニティ再構築の必要性
- ・やはり土台となる家庭での子育てが、孤独で苦しいものになってきた
→家庭をエンパワーメントすることが求められている

2-②“すべての子ども”のための学びの視点

a. 時代が移った今、ことさら重視されるべき幼児教育の本質：遊び

☆学びの連続性を意識した遊びへの援助・・・「環境を通して行う教育」

例1 5歳児のより本物らしいレストランごっこ→メニュー、カンバンetc.: 文字

例2 勝ち負けが面白さの中心になったドッチボール→チームの人数: 数

子どもは遊びたいから遊び、

結果として、保育者の期待する様々な力や態度を、自ら身に付ける

☆そこでの・・・協同性と創造性

- ・小集団・クラス集団が有機的に協働する
- ・個の充実を土台に、群れた遊びが、継続する
- ・そこで求められる、作る⇔遊ぶ が可能な環境

☆幼児教育を支える、3つのDの循環

(デザイン・計画→ドキュメント・記録→ディスカス・話し合い)



物作りのスペース(常設)

☆結果としてもたらされる、主体的で、対話的な、深い学び

b. 幼児教育を小学校教育に 「接続」させることの意味・意義

【アプローチ・スタートカリキュラム開発】

- ☆県・幼児教育センターと市・教委の協力のもと、地元の公立小学校と協働
- ☆年間8回の研究会に加え、複数回の授業・保育相互参観 →28年度も継続
- ☆「知」「徳」「体」の視点により、接続期の育ち・指導のあり方を、幼児期と学童期の双方で相乗りして検討

子どもの発達に基づいた原理原則の相互理解

本プロジェクトでは、幼児教育と小学校教育における違い・・・、例えば「目標」の捉え方や、「ねらい」や手順の共有の仕方、さらに生活への取組み方等、様々な違いに気付きました。

このことを相互に理解した上で、接続期にちょっとした工夫があれば、子どもは安心して自らギャップを越えていくことができるのではないかと考えました。

(例) 当番活動・・・今まで入学3日以内に決めていた「黒板係」を決めずにスタート⇒係がなくても黒板を消す子ども⇒黒板消しが3個しかないのでもやりたくてもできない子ども⇒どうしようかという相談⇒係を決める

- ☆カリキュラム開発のプロセスを重視すると同時に、成果物であるカリキュラムを親や地域で共有し、接続のためのツールとして生かす試み

幼児教育(遊びが中心) ⇔ 学習指導要領改訂(アクティブ・ラーニング) ⇔
新大学入試制度(2020年)の根幹が、「接続」カリキュラムの開発・マネジメント

2-③持続可能性への取り組み

a. 自然生態系に関する持続可能性

b. 文化・人に関する持続可能性

a. 自然生態系に関する持続可能性 【活動例】ファンタジーと環境教育の接点

子どもたちのかっぱをめぐるファンタジックな活動が、たまたま出会った地域の伝説との関わりにより、現実の環境問題につながった事例。小学校就学前の子どもたちがリアルな環境問題に出会うためには、ファンタジー（例えば、かっぱ）がその入り口として必要なのだと気付かされました。



b. 文化・人に関する持続可能性 【活動例】遊び文化と伝統文化との出会い



グローバルな近未来では、語学力だけでなく、自分や自分を育てた文化・風土について語れることも求められます。次に紹介するのは、どろ粘土遊びの延長線上に焼き物(陶芸)を位置づけた活動です。日本の焼き物文化は歴史的・芸術的にも優れており、子どもたちは遊びの延長線で、窯の炎を通して本格的な焼き物文化に出会うこととなります。燃料となる赤松のまき割り、窯焚き(4日間)は、地域の人が誰でも会員になれる焼き物サークルと卒園する子どもの親たち、そして保育者が力を合わせて行います。

2ー④地域コミュニティを再構築する拠点の必要性

a. コミュニティでの育ちを再生する仕組み

- * 「午後の保育」において、異年齢クラス(3・4・5歳)を編成
- * そこに、担任および主任を配置する
- * 異年齢のクラス担任および主任は、「共通利用時間」では、サブの保育者として保育に入る
- * 異年齢のクラス担任および主任と、「午後の保育」から入る保育者が一緒になって、毎日ミーティングを行う
- * そこで求められるのは、家庭的・地域的でゆるやかなカリキュラム
- * 小学生(放課後児童クラブ)や地域のボランティアとの交流も大切にする
- * 大きな子ども⇔小さい子どもの“遊びの伝承”が翌日の「共通利用時間」の保育も豊かにする
- * そこには、養護教諭を配置した休息スペース(午睡への個別対応含む)を設置



多様な保育時間への対応

b. 地域・行政との協働



- a. 未就園親子教室での交流
マタニティ&ベビー、1歳児、2歳児クラス
- b. 地域子育て支援拠点事業
re. (カフェ)との協働
- c. アグリ・プロジェクト
職員と保護者が地域と協働(味噌作りなど)
- d. 地域の元気な高齢者を行うファーム事業
子どもたちを行う農作業
- e. 子ども・子育て会議
幼、保、認こが、一体となった取組み
- f. 佐野市「特別支援ネットワーク」
市内すべての学齢4歳児が対象
- g. 街作り会社との協働の可能性
企業と協働した地方創生・・・農業と林業、
そしてバイオマスを組み合わせ、雇用の創出、
子どもたちへの安全な野菜の供給

18

☆認定こども園は、保育園と幼稚園をただ合わせただけのものではないと
考えます。小学校就学前の保育・教育を中心に、地域コミュニティを再構築
する拠点として、ささやかですが貢献したいものです。

2-⑤子育て支援・・・親・保護者は支援を要する弱い存在、 だけではない

☆親・保護者たちが“お客様”にならず、保育をめぐって様々な協働する

- a. 保護者・親たちが顔見知りになり、つながるためのサポート
- b. 保育をとおして子育ての楽しさややりがいを感じるためのサポート
- c. なかなか子育ての楽しさに向かえない場合の“相談”あるいはサポート
- d. 小学校就学前の子どもの育ちに対する情報提供やコンサルテーション

→現場では、このa～dが、有機的につながるような仕組みが必要



(例)

- ・夏祭り…今年で25回目、地域に定着
- ・自立建設…保護者・職員・地域
- ・穴窯で活動するサークル「泥工房」との協働
- ・子育て支援NPO re.(カフェ)
- ・子育て相談事業
- ・学校カウンセラーの関わり
- ・懇談会
- ・園からのコラム
- ・プレスクール など

おわりに

認定こども園は革命です。制度を考え出した人を尊敬します。漕ぎ出した船に乗った私たちには、行動する自由と責任があると思います。幼保を合わせたものが認定こども園ではない、と私たちはすでに感じています。これは化学反応です。認定こども園制度という触媒によって、素敵な物質が作り上げられました。それは、自ら次々と柔軟に変化させ、他の物質をも変革させることができるような、かつてない新しいものです。
(後略)

・・・2009年、認定こども園制度がスタートした頃の、ある園長先生の言葉です。本日のテーマ『今後の幼児教育のめざす方向性』のエッセンスが、この言葉の中にあるように思えます。

ご清聴、ありがとうございました。

